

フォンテーヌブローの森復元プロジェクト

フォンテーヌブローの森は 19 世紀にカミーユ・コローやジャン＝フランソワ・ミレー、テオドール・ルッソーといった著名な画家たちが描いた森として世界的に知られています。日本人にも非常になじみのある森です。

しかし、いまやその森は 19 世紀当時とはかなり違った景色になっています。画家たちが描いた岩のある風景は、松の林で見えなくなり、訪れる観光客ががっかりして足を遠のける原因にもなっているようです。

そこでフランス国立森林庁（ONF）では、フォンテーヌブローの森の復元プロジェクトを、環境や生態系、経済的側面等を勘案しながら、2015 年より本格的に開始しました。

筆者は ONF 総局長の招待を受け、森の 3 地区の責任者たちと、オルセー美術館の元キュレーターでユネスコ文化遺産申請の評価専門委員をしているキュレーターらとともに、8 月 23 日（木）に同地を視察させていただきました。

弊館の事業と直接の関係はありませんが、同視察の様子をご参考までにご報告させていただきます。

1. 歴史的背景

フォンテーヌブローの森は歴史的に「開かれた」森でした。そこには多くの「空地」が散在していました。しかし、19世紀の森林当局はそれらの「空地」を埋めようと、「北方松」のような痩せた地にも耐えられる種類の樹木の植樹を試みつつ、土地使用権を制限して、周辺住民たちが開拓した放牧場や牧草地を削減しようとしてきました。ただ、1870年以降になると、軍事演習場が開設されたことで一時的に森の開墾が推進されました。

小高い丘の斜面に開墾された「空地」は、無数の岩と木々が散在する様子から、「カオス(混沌)」と呼ばれています。そこは象や鯨、亀のように見える特異な形をした大きな岩石群、曲がりくねった木々、灰色の砂地などがモザイクのようになっている、絵画的主題に事欠かなかったため、自然をモチーフに描く多くの画家たちが訪れ、住みつくようになりました。1820年から1870年頃まで同地で制作活動をしたカミーユ・コローやジャン=フランソワ・ミレー、テオドール・ルッソーといった画家たちは「フォンテーヌブロー派」あるいは「バルビゾン派」と呼ばれています。その精神は後の印象派画家たちにも受け継がれています。彼らは、1853年に環境保護活動家らとともに「カオス」の風景を保存する世界初の自然保護運動を起こしました。その結果、1861年に数百ヘクタールの芸術保護区が設けられ、その中ではいかなる伐採も植樹も禁止されました。



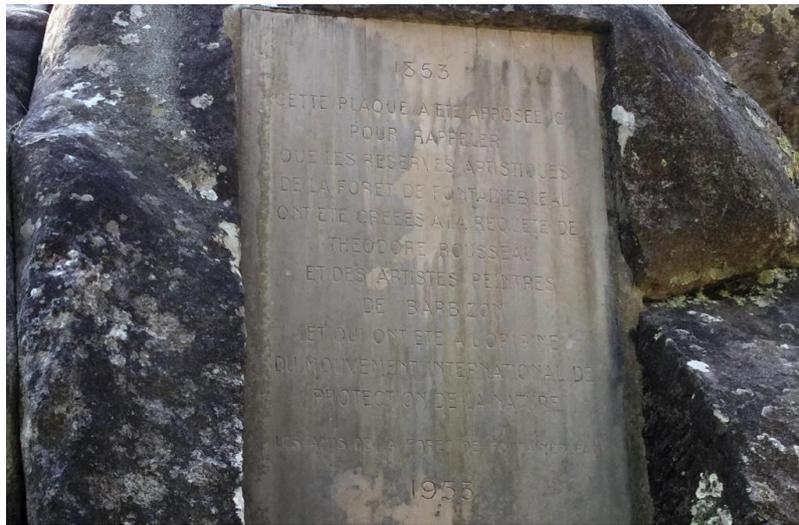
岩に掘られたテオドール・ルッソーとジャン=フランソワ・ミレーの肖像（2018年筆者撮影）



カミーユ・コロー「フォンテーヌブローの森」1830-32頃 Musee d'Art et d'Archeologie de Senlis
(<https://www.wikiart.org/en/camille-corot>より)



カミーユ・コローが前掲の絵を描いた場所（2018年筆者撮影）



1853年にテオドール・ルッソーらバルビゾンの画家たちが始めた世界初の自然保護運動を記念する石碑

ところが、20 世紀に入ると、森林当局は、牧草権の剥奪、松柏類の植樹等々、山林の管理方針を大幅に変更したことから、森の風景が著しく変わりました。軍事活動、砂地の開発、土地使用権付与、それに山火事などが大幅に減少し、森に沢山の松が成長して、「カオス」が松林の中に埋没してしまうことになりました。もともと砂地であるため、やせた土地に耐えられる松のような樹木や経済的価値の低い雑木、外来種のシダや雑草等が密生するようになったのです。その結果、森は閉鎖空間となり、絵画的な岩石群が見えなくなり、人が踏み込めないようになってしまいました。訪れる観光客にとっては、かつて画家たちが描いたような風景を味わうどころではなく、幻滅するような状況も起きてきました。



松林に隠れる岩石群（2018年筆者撮影）

2. 森の復元プロジェクト開始

そこで、森の周辺の市町村に住む芸術家たちから、かつてのような景色を取り戻してほしいとの嘆願が出され、それに応える形で、2011年以降、フランス森林庁（ONF）は「フォントレーヌブロー特定森プロジェクト」を立ち上げ、その一環として、環境に留意した伐採・搬出技術を試験的に導入し、往年の絵画的風景の復活を試み始めました。風景の平凡化を、フォントレーヌブローの森の等級付けの規範に従って、回避する努力が始まったのです。

2015年から芸術保護区復元の第一ステージが本格的に始動しました。2016年にはフォントレーヌブローの北西に位置するバルビソンの地区で、2017年にはフォントレーヌブローの南に位置するブロン・マルロットの地区で、日の当たる「空地」を回復し、それを維持する工事が着手されました。今年も継続されているこの開拓作業は、岩石群を見えなくしている樹木を間伐し、陽光のあたる視界の開けた場所をつくって19世紀の画家たちが描いた風景を復元することが主目的となっています。ただし、間引きする松や雑木を選定する際には、諸分野の専門家の意見をもとに、生物多様性、環境保護、経済的な側面のほか、人の散策にとってもやさしくなるように配慮したうえで、絵画的な要素を勘案しながら進めています。



フォントレーヌブローの森（Google Map を加工）



復元されたブロン・マルロット地区の「空地」 (2018年筆者撮影)

3. 「フランシャル」復元プロジェクト

2019年はフォンテーヌブロー市の西方に位置する「フランシャル」というパリに近い象徴的な地区を復元プロジェクトの対象地区に指定しています。

このプロジェクトの目的は教育的、観光的、芸術的価値の向上にあります。開発作業現場への生徒や一般人の訪問を企画することによって森の管理や芸術、歴史等についてよりよく知ってもらうことも計画しています。

また、同地区には日本の彫刻家に作品を注文し、この森のアイデンティティを日本と関連付けようともしています。



視察中の一行 (2018年筆者撮影)

4. 日本の経済界への期待

フォンテーヌブローの森は日本でもよく知られています。テオドール・ルッソーやジャン＝フランソワ・ミレーなどの自然派の画家たちの作品は、日本の多くの美術館や企業のコレクションに収蔵されています（例えば山梨県立美術館の JF ミレーの作品、八王子の村内美術館など）。バルビソンの画家たちを魅了した風景を味わうために現地を訪れる日本人観光客も少なくありません。

そうしたことから、ONF はフォンテーヌブローの森の「復元プロジェクト」には、日本企業等の資金的協力を期待を寄せています。そのことを通じて、日仏の新たな文化交流を創出し、減少傾向にある日本の観光客を取り戻したいと願っているからです。

2019 年の「フランチャール」復元プロジェクトの費用見積もりは総額 22 万ユーロということで、その内訳は下表のようになっています。

工事内容	Nature des travaux	金額 (税含まず、€)
風景調査	Etude paysagère	25,000
材木搬出 (伐採除く)	Débardage des bois (hors abattage)	35,000
追加風景工事	Travaux paysagers complémentaires	35,000
日本の彫刻	Sculpture japonaise	60,000
風景とアートの解説小 道	Sentier d'interprétation sur le paysage et l'art	40,000
森の祭開催	Organisation d'une fête de la forêt	20,000
写真解説のアトリエ	Ateliers de photolangage	5,000
合計額	Montant total	220,000

5. ユネスコ文化遺産登録をめざす

並行して、フォンテーヌブロー市、フォンテーヌブロー城、ONF は共同して、既にユネスコ世界文化遺産に登録されているフォンテーヌブロー城の延長として、すなわち城と森を一体のものとして、フォンテーヌブローの森の文化遺産登録を視野に入れて関係当局への運動も展開しているとのこと。城と森が形成する不即不離の文化遺産群は、ユネスコのラベルが付与されることによって、世界的認識度がさらに高まることが期待されています。そうしたラベリングに相応しい水準に到達させるためにも、ONF はハイレベルの文化的次元のプロジェクトをフォンテーヌブローの森で展開しているのだそうです。

以上